

経営協議会学外委員からのご意見に対する取組状況(経営協議会)

令和7年度

議題名	学外委員からのご意見等	ご意見を頂いた 経営協議会	取組状況
令和8年度の教育組織の改組等について	○情報学部独立や工学系の広域化は他大学でも見られる傾向であるとした上で、山口大学がこれを行うことで「どのような強みを出せるのか」、また「地域のニーズにどう応えるのか」ご教示いただきたい。	第129回 (令和7年9月24日)	【山口大学ならではの強み】 情報学部の独立により、物理学等の工学的な枠組みに縛られない柔軟なカリキュラム編成が可能となり、本学が誇る衛星リモートセンシング技術と人間情報学を融合させた独自の先端教育を実現する。創成工学科では従来の縦割り組織を統合した「1学科4系」体制を構築し、異分野展開科目の必修化を通じて、深い専門性と他分野の知識を併せ持つ「創造的工学人材」を組織的に養成する。建築学科の設置も、理工学に人文・社会科学や芸術を統合し、俯瞰的視野から創造性を発揮できる独自の専門教育を深化させるものである。 【地域のニーズへの応答】 「やまぐち未来維新プラン」が掲げる宇宙利用産業の創出や産業デジタル化に対し、再編で強化された先端IT・工学人材を供給することで県の成長戦略を強力に支援するとともに、深刻な技術者不足に悩む地域産業界や自治体へ、横断的知識を持つ即戦力を安定輩出する。また、建築学科では地域の歴史・文化を理解し、災害に強い住環境を支える建築士を養成することで、安全・安心なまちづくりに寄与する。さらに、宇宙工業高専等とのシームレスな連携により、高度人材の地域定着を促進する。
「明日の山口大学ビジョン2030」自己点検・評価結果について	○2030年に向けた中長期の経営計画において、策定時からの急激な社会変化(物価高騰や技術革新など)を踏まえ、重点戦略や主要施策そのものを見直す必要があるのではないか。	第131回 (令和7年12月23日)	自己点検・評価は、3年ごと(2025年度、2028年度、2031年度)に実施することとしており、進捗及び達成状況を確認することで、ビジョンの達成に向けて今後の方針等を検討する機会としている。 現時点で重点戦略等の見直しの予定はないが、ビジョンでは「しなやかさ」を、「絶え間なく変化する世の中において、その変化を敏感に感じ取って対応し、あるいは流れを作っていくために重要な要素」と定義しているため、引き続き、社会ニーズの変化に「しなやかに対応」し、ビジョンの達成に向けて今後の方針等を検討していく。
令和7年度人事院勧告への対応について	○給与のベースアップ分と賞与を切り離して取り扱うことはできないのか。特に、業績が厳しい際に賞与の支給月数を調整することはあり得るため、人材確保のための基本給維持と賞与調整を組み合わせたような、柔軟な検討ができないか。 ○提示された極めて厳しい財務状況や将来のキャッシュフロー予測を踏まえ、法人の存続を考えれば、今回の対応方針案(見送り)に賛成せざるを得ない状況である。	第131回 (令和7年12月23日)	ご提案の「基本給水準の確保と賞与による弾力的な調整」という考え方は、法人の持続可能性と雇用安定を両立させる一案とご助言いただいた。賞与の調整については、多くの職員が賞与を含めて生活設計を立てており、職員の理解が必要である。大学経営が厳しい状況において、職員が納得する提案は大変難しいと思われるが、生活設計の安定性や、優秀な人材の貢献意欲などを考慮し、様々な観点を踏まえて総合的に検討を進めていきたい。

経営協議会学外委員からのご意見に対する取組状況(経営協議会分科会)

令和7年度

分野	学外委員からのご意見等	ご意見を頂いた 経営協議会	取組状況
<p>教育 (テーマ:深化した「シン・文殊グループ」を核とする異分野融合研究実践型博士後期課程学生育成プロジェクト)</p>	<p>○異分野3人組グループ「シン・文殊グループ」による異分野融合研究の成果は、既存の学会と直結しにくいと思われるが、どのように公表・活用していくのか。 ○使用しているPROGテストは本プログラム用にカスタマイズされたものか。また、数年後の追跡調査を行う予定はあるか。</p>	<p>第127回 (令和7年6月20日)</p>	<p>○ご指摘の通り、異分野融合研究の成果は既存の学会体系と直結しにくい側面があるため、「シン・文殊グループ」の活動を単なる研究成果の創成に留めず、異なる専門性を持つ学生同士の連携を通じた「トランスファブルスキルの涵養」を目的とする実践の場と位置づけ、博士人材に求められる高度な対人・対課題スキルのトレーニングに有効活用する。 ○使用しているPROGテストは汎用的な社会人向けであり、博士後期課程学生向けにはカスタマイズしていないが、社会人とのスキル比較ができる点に大きな利点がある。測定の結果、本学学生のスキルスコアは社会人の新入社員～3年目の平均点よりも上回っていることが客観的に実証されている。 なお、数年後の追跡調査については修了生とのネットワーク構築や協力体制の進展によって検討する。</p>
<p>研究 (テーマ:研究環境に関するアンケート調査について)</p>	<p>○医学部の診療業務など部局特有の事情を分析するには、属性別のクロス集計が不可欠である。集計結果がまとまる時期と、部局へフィードバックする時期を明示すること。また、単なる分析で終わらず、改善の方向性を示すことが重要である。 ○これまでの大学は「一律の教育研究者像」に全員を当てはめてきたが、「人や研究分野によって差別化すること」「どこに比重(ウェイト)を置くか」という差別化によって生産性を高めるべきではないか。 ○「研究時間がない」ということに対してどのくらいストレスを感じているか、調査する必要がある。2年後などに同じ項目で定期的にアンケートを実施し、相対的にどの程度改善されたかを長期的に検証し続けるべきではないか。</p>	<p>第127回 (令和7年6月20日)</p>	<p>・アンケート結果については、令和7年(2025年)10月に学内教職員へ集計結果を公表し、フィードバックを完了した。分析にあたっては、医学部の診療・臨床業務が研究時間を圧迫している実態などを詳細に把握するため、多角的にクロス分析を実施した。この結果を踏まえ、2025年12月に若手研究者育成等WGより18項目の具体的な改善施策を盛り込んだ提言書を取りまとめた。単なる分析に留まらず、今後はこの提言に基づき、構造的な課題の解決に向けた改善を段階的に実行して行く予定で、既に一部は改善に着手している。 ・上記の提言書において、生産性向上の観点から以下のような具体的な提案を行っている。 評価制度の見直し:一律の評価ではなく、教育・研究・地域貢献といった多様な職務や、専門分野ごとの特性を考慮した公正な評価制度の設計。 業務の見える化と均等化:研究実績の高い教員の過重負担を避けるため、業績データを学部内の業務配分に反映させ、インセンティブを付与する仕組みの構築。 職位の多層化:「卓越助教」や「研究先進教授」といった新たな職位を導入し、意欲ある研究者が研究に集中できるよう、管理業務の免除等のインセンティブを選択できるキャリアパスを構築。 ・今回実施したアンケート調査を一過性のものにせず、長期的に検証し続けるPDCAサイクルを構築する。具体的には「研究環境の構築を継続して議論し、大学執行部へ提案できる組織」の立ち上げを目指し、令和8～10(もしくは第4期中のR9まで)年の期間で、改善実行、改善状況調査、達成の確認、アンケート調査、第5期中期計画に向けた提言を実施する予定である。</p>
<p>地域連携 (テーマ:リカレント教育エコシステム構築支援事業について)</p>	<p>○経営者トップセミナーについて、地域内の視点だけではマインドセットの転換が難しいため、講師選定だけでなくプログラムの設計段階から、地域外や国際的な視点を持つ人材を参画させるべきではないか。 若手経営者や事業承継者など、対象層(ターゲット)とレベルを明確に絞り込むべきである。対象が広すぎると内容が薄まり、講師も対応に苦慮するため、参加者のレベル感を揃えた上で、単なる講演形式ではない教育プログラムとしてデザインすることが重要である。 ○コンビナートDXプログラムは、実質的な活動内容が見えにくいので、対象が「経営部門」なのか「現場サイド」なのかを明確にし、教育内容を絞り込まないと効果が見えないのではないか。</p>	<p>第129回 (令和7年9月24日)</p>	<p>山口県経営者トップセミナーについては、当初の検討案では地域内の講師が中心であったが、実際のプログラム設計においては、日本アイ・ビー・エム株式会社の山口明夫代表取締役社長や、株式会社インターネットイニシアティブの村林聡取締役副社長など、我が国のトップリーダーを講師として招聘した。これにより、生成AI時代の企業改革やDXによる地域社会の実現など、国際的・全国的な広い視野をプログラムに組み込んで実施した。 また、山口県内を代表する企業の「次世代を担う若手経営者」を対象を明確に絞り込んで設計した結果、実際の受講者統計においても30～40代の若手経営層が90%を占めるに至った。プログラムにおいても2泊3日の合宿形式を採用し、講演だけでなくワークショップ(基礎編・応用編)やグループワーク演習を組み込んで実施した。 コンビナートDX人材育成プログラムについては、瀬戸内コンビナートの生産性向上を担う「県内企業に勤務する高卒作業員」を主たる対象とし、現場の中核となる中堅作業員の育成をターゲットとした内容での実施を検討中である。</p>